

7. 事例

7-(1) 神経症的登校拒否 — 分離不安 —

1. はじめに

分離不安による登校拒否は、主に低学年の子供にみられ、とりわけ、母子分離不安が中心である。

家庭内の問題から、母親が、子供に対して過保護的・過許容的態度、または、不安に満ちた矛盾した態度を子供にみせるため、子供の不安をより一層強めることになり、母子が、心理的に離れられなくなるのである。

このように、家庭問題に由来する不安を、母子ともども、学校問題にすり替えてしまうことにより、登校拒否がはじまることになるのである。

2. 事例

(1) 主訴 登校拒否 — 分離不安

(2) 対象 A・S 小学校1年男子 6歳

(3) 問題の概要

昭和56年5月25日来所

小学校に入学して、2週間たったころ、腹が痛い、頭が痛いなどといって、しきりに身体の痛みを訴えるようになった。そのうち、早退するようになり、授業も満足にうけられなくなった。この状態が数日続いてから、しばらくして、まったく学校に行かなくなったので、両親は、困って医者につれて行った。医者では、身体の異常が認められず、両親もほとんど困ってしまった。そのとき、学校から教育センターを紹介され、来所した。その後、継続して来所するようになった。

(4) 資料・情報

① 生育歴

ア. 胎児期・出産時には異常が認められなかったが、さか子であった。体重は(3,550g)あった。

イ. 母乳でなく、ミルクで育てられ、5ヵ月で離乳した。

ウ. 「トイレットトレーニング」に失敗したため、3歳までおむつをしていた。

エ. 現在も夜尿や頻尿の傾向がある。

オ. 小さいときから、厳しすぎるしつけのため、父親をこわがっている。

カ. 本年4月に転居してきたばかりである。

② 家族構成及び家庭環境

ア. 父：35歳… 公務員で、厳しくしつけることが教育だと信じているため、命令、禁止が多い。

イ. 母：33歳… 父親の方針に従っているが、不満を持っている。そして、子供を必要以上に、支配しようとする態度を示す。

ウ. 妹：3歳… 本人は、かわいいと思いがらじめる行動をとる。

③ 諸検査・検査

本人の問題行動を理解するため、性格や情緒面での問題を知り、それらの問題が、本人をとりまく家族環境、とりわけ親の養育態度との関わりを調べてみたいと考えた。そこで、次頁図12のようなテスト・バッテリーを編成し実施した。

(5) 診断

① 親の拒否的・支配的な態度から、認められたいための攻撃的な態度がみられる。

② その攻撃的な態度は、内にこもりがちで発散できないでいるときもある。

③ 前の幼稚園での生活印象が強く出ているため逃避的になり、行動が消極的である。

④ 両親の生活態度をあらためること、特に、母子関係を変容させていかないかぎり、重症になることも予想される。

(6) 指導方針

① 本人に対して

ア. 遊戯療法を実施して、攻撃性を開放し、自立できるような生活態度と、調和のとれた自己実現をはかる。

イ. なるべく多くの友達と接触させ、健全な友達関係をつくれるようにする。

② 両親に対して (特に母親)

ア. 母と子の分離不安が強まっていることから、母親の情緒安定をはかるとともに、子